

第 2 回 都市対抗世界子ども将棋団体戦

— ベラルーシチームとドイツチームを招いて —

理事長 山田 彰

主催：将棋を世界に広める会

後援：日本将棋連盟
外務省

協賛：全日本空輸株式会社（ANA）
渥美雅之 杏林堂名誉会長

【Ⅰ】準決勝まで

今年開催の「第 2 回 都市対抗世界子ども将棋団体戦」は、欧州諸国を対象に開催した。ISPS は、欧州将棋連盟に所属する各国の将棋連盟関係者などを通じて、参加を募ったが、最終的にはベラルーシから 2 チーム、ドイツ、フランスから各 1 チームの計 4 チームが参加した。幾つかの国（都市）は、チームとしての参加を検討していたが、3 人の子ども（15 歳以下）が集まらず、参加を断念することになった。

欧州では、以前は子供たちの将棋の大会も各地で開催されていたが、コロナ禍ですべて中止に追い込まれ、パンデミックが終わった後も大人たちの大会は旧に復したが、子どもたちの大会は元に戻っていないという状況にあるようだ。

準決勝は、8 月 24 日、ドイツ対フランス・グルノーブル、ベラルーシのミンスク将棋道場チーム対銀冠チームの間で、それぞれ 81dojo を使ってオンラインで行われた。結果は、

- ① ドイツ 3 - 0 フランス・グルノーブル
- ② 銀冠 3 - 0 ミンスク将棋道場

で、ドイツ・チームとベラルーシの銀冠チームが日本開催の決勝戦に進出することになった。

ベラルーシは、子どもたちについては欧州で一番普及が進んでいる国である。30 名を超える子どもたちが常時将棋を指しているようで、2 チーム以上の参加も可能であった。

【Ⅱ】子どもたちの来日と決勝戦

今大会は、全日空からの支援（欧州・日本間の航空券提供）を得て、2 チーム（各引率者 1 名と子ども 3 名）を国際将棋フォーラムの時期に合わせて、日本に招待し、東京の旧将棋会館で決勝戦を開催することにした。

訪日チームが決まった後、航空券、査証、宿舎の手配や滞在日程の準備に苦労したが、11月7日、ベラルーシとドイツの子どもたちが無事に来日した。

翌8日、一行は東京スカイツリーなどを見学の後、午後千駄ヶ谷の旧将棋会館を訪れ、国際将棋フォーラムの一環として行われていたプロ棋士による指導対局、国際将棋コーナーでの自由対局で、本番前に腕を磨いた。

9日は、いよいよ旧将棋会館での決勝戦となり、ベラルーシ銀冠チームが優勝したが、その様子は別稿をご覧願いたい。

決勝戦の後、両チーム一行は、新将棋会館で羽生善治会長、藤井聡太七冠と会う機会が設けられた。子どもたちはとても感激した様子で、羽生会長から「何か聞きたいことはありますか？」と振られても緊張のあまりか声が出ない。代わりにドイツの引率者ヤニックさんが「将棋が強くなるためにはどのような勉強法が良いですか？」と質問し、羽生会長は「これは藤井さんに答えてもらいましょう」と任せた。藤井七冠は「自分は小さい頃は詰将棋の問題をよく解いていた。けれども、これが正解という勉強方法はないと思うので、自分が好きなやり方を見つけるのが良いでしょう」と語りかけた。子どもたちにとって、二人に会えたことが大きな思い出として心に残ったようである。

その後、表彰式を行い、両チームに表彰状、賞品の棋書が渡されたが、子どもたちはさっそく棋書の詰将棋の問題を解いていた。

10日は、子どもたちを案内して午前は隅田川クルーズなど観光に充て、午後は両国将棋

センターに将棋を指しに行くことにした。すると、子供たちの一行に国際将棋トーナメントのベラルーシ代表とウクライナ代表、ベラルーシ人の元欧州チャンピオンも一緒についてきた。ウクライナのオメルチャクさんに「どうしてベラルーシの人と一緒に来ることになったの？」と聞いたら、

「ベラルーシのチームの引率者リセンカさんとヨーロッ

パで将棋を通じて良く知っていたから」との返事。「二人は Shogi friends だね」と言ったら、「そうだよ」と彼は答えた。将棋を通じた、国境を越える友情・・・現在の両国を取り巻く状況を見ると、ちょっと心が温くなるエピソードであった。

両国将棋センターでは、席主の佐久間さんの細やかなご配慮により、一行は日本のアマ強豪や子供たちと対局する機会を持ち、最後は西山女流三冠の扇子もプレゼントされるな



両国将棋センターにて

ど、時間の許す限り将棋を楽しむことができた。

ドイツとベラルーシの子供たちは、時間があればミニ将棋盤やスマホで将棋を指しているという感じで、日本にいる間は将棋三昧の日々を過ごした。11日、羽田空港から帰国する彼らは、日本の滞在が本当に楽しくて、帰りたくないですと、感想を漏らしていた。

【Ⅲ】 今後に向けて

都市対抗世界子ども将棋団体戦は、去年は東アジア・大洋州、今年は欧州を対象に開催したが、子どもたちのチームの募集に困難が付きまとった。参加チームが少なかったことは、率直に言って反省材料である。欧州では、前述のとおり（ベラルーシを除けば）子どもたちが直接顔を合わせて集まり将棋を指す機会が少ないようであり、子どもへの普及はまだ先の長い課題である。ただ、レーヴェキャンプ・ヨーロッパ将棋連盟（FESA）会長は「ISPSの世界子ども将棋団体戦は、将棋を指す子供たちにとって大きなモチベーションになったと思う。ヨーロッパでも、子どもたちが将棋を指す機会をもっと増やしたい。」と語っていた。そして、子ども将棋団体戦の様子は、FESAのウェブサイトでも紹介された。

世界の各国で将棋が広まり、根付いていくためには、その国の子どもたちが継続的に将棋を指すようになることが重要であろう。都市対抗世界子ども将棋団体戦の開催を含め、世界の子どもたちに将棋を広める努力を継続していきたいところである。 （了）

